

大学の外国語学部における必修科目再履修者の現状と取り組み

著者	平田 和彦
雑誌名	研究論集
巻	91
ページ	247-265
発行年	2010-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00006169/

大学の外国語学部における 必修科目再履修者の現状と取り組み

平 田 和 彦

要 旨

本学外国語学部における必修科目再履修者の現状を論考する。筆者は本年度(2009-2010)、1年次必修科目である「英語Ⅱ」(全員再履修生)を担当している。したがってこのクラスは受講生全員が2年生～4年生であり、通常の1年生だけで編成されている「英語Ⅱ」のクラスとは大きく性格が異なっている。すなわち、初期段階より学習者の習熟度・学習意欲・学習傾向および学習嗜好・授業態度・参加意欲等の点でさまざまな学生たちが1つの教室に会する状況が生まれていると言える。

本稿では授業担当者が直接的な学習指導のみならず、クラスを取り巻くさまざまな問題点を報告し、その実態の検証と改善策を学生からのアンケート・データをもとに考察していく。

キーワード：英語教育、再履修、必修科目、欠席過多、学習意欲

1. はじめに

今日大学では学生の基礎学力の低下が問題視されているが、このことは必修科目における再履修生の増加にも影響を与えている。しかし、「どうして再履修しなければならなくなったのか」という問いに対する各学生の事情は基礎学力の低下だけではなく、多岐にわたっている。その1つとして、学生の授業への不参加があげられる。具体例として、再履修生の出席状況を表1として示す。

表1 再履修生の授業への出席状況

授業回(月/日)	登録	出席	率	授業回(月/日)	登録	出席	率
第1回(4/15)*	40名	32名	80%	第15回(6/12)	39名	19名	49%
第2回(4/17)	40名	24名	60%	第16回(6/17)	39名	9名	23%
第3回(4/22)	40名	24名	60%	第17回(6/19)	39名	15名	38%
第4回(4/24)	40名	22名	55%	第18回(6/24)	39名	15名	38%
第5回(4/29)	40名	19名	48%	第19回(6/26)	39名	18名	46%
第6回(5/1)	40名	26名	65%	第20回(7/1)	39名	20名	51%
第7回(5/8)	40名	25名	63%	第21回(7/3)	39名	16名	41%
第8回(5/13)	40名	19名	48%	第22回(7/8)	39名	15名	38%
第9回(5/15)	39名	24名	62%	第23回(7/10)	39名	12名	31%
第10回(5/27)	39名	16名	41%	第24回(7/15)	39名	23名	59%
第11回(5/29)	39名	17名	44%	第25回(7/17)**	39名	18名	46%
第12回(6/3)	39名	19名	49%	第26回(7/22)***	39名	18名	46%
第13回(6/5)	39名	18名	46%	第27回(7/24)***	39名	20名	51%
第14回(6/10)	39名	18名	46%	第28回(7/29)****	39名	28名	72%

(注) *はオリエンテーション、**は考査範囲発表、***は考査範囲連絡、****は前期末考査の実施を示す。

表1に示したように英語Ⅱは前期合計28回の授業を行った。表から分かるように、出席者が登録者の半数に満たなかった回もあり、それが28回中17回も存在する。

一般的に必修科目は授業への出席を重視する場合が多い。しかし出席状況を見る限り、これが本当に「必修科目」＝「卒業必要単位」と学生が強く意識しているとは考えにくい。この点は他の必修科目である英語の再履修クラス(但し1回生対象)でも同じで、欠席過多の者は単位を取得することの重要性を理解していないように思える。もちろん、出席状況のみでそのクラス実態の全てを判断することはできない。しかし必修科目への参加は学生としての最低条件であろう。基本的なことであるが、授業に参加しようとする学生に対して、直接指導を行うことは不可能である。少し以前までは「欠席」＝「コミュニケーションの消滅」という状態にならざるを得なかったが、本学ではBlackboardなど最新システムが完備されている。この方法は消極的なコミュニケーション法ともとれるが、欠席者を放置しておくことは避けられるのではないかと考えている。この論考では再履修者クラスの現状報告と取り組みを報告する。

2. 「再履修」が学生に及ぼす影響(報告)

筆者は4月第1回目の授業でクラスの学生に対し、Uehara(2000)のアンケートに若干手を加えたものを用い、再履修生の実態と意識調査を実施した。内容を表2に示す。

表2 再履修生へのアンケート結果（第1回授業時）

1 あなたはふだん自宅で英語を勉強しますか？ ア する 11名 イ しない 21名	ア TOEFL・TOEICなどの検定対策 2名	
	イ 英字新聞・雑誌などを読む 1名	
	ウ 英会話スクールに通う 0名	
2 1でアと答えた人はどれぐらいの時間勉強しますか？ ア 30分以下 5名 イ 30分～1時間 5名 ウ 1時間～2時間 1名 エ 2時間以上 0名	エ TV・ラジオ講座などを利用する 0名	
	オ その他 0名	
	6 あなたは海外（英語圏）に行ったことがありますか？ ア ある 13名 イ ない 19名	
	7 6でアと答えた人は場所・期間を教えてください。 （※詳細は表3参照）	
3 あなたが英語で苦手と感じるものは何ですか？ （複数回答可） ア 文法 19名 イ リーディング 15名 ウ ライティング 24名 エ スピーキング 21名 オ リスニング 21名 カ その他 5名	8 今年度『英語Ⅱ』を再履修することになった理由は何ですか？ （※詳細は表6参照）	
	9 8の内容をふまえて、『英語Ⅱ』の授業にどのように取り組もうと考えていますか？（回答形式自由） ・ 授業にてできるだけ出席する 26名 ・ 予習・復習・課題提出をする 6名 ・ 授業に集中する 2名 ・ その他 4名	
	4 あなたは大学の授業等以外にも英語を勉強していますか？ ア している 3名 イ していない 8名	
5 4でアと答えた人は具体的に何をしていますか？ （複数回答可）		

2. 1. 再履修者の英語学習の特徴

表2から再履修者の英語学習への取り組みの特徴が顕著に表れている。特に自宅での学習状況と英語の苦手分野の質問においては、再履修に至った要因が明確に表れている。次項より再履修者が英語学習をする上での問題点について述べる。

2. 1. 1. 再履修者の自宅での英語学習

再履修者の自宅での英語学習への取り組みを調査した。その結果、平素から自宅で英語学習をしている者が11名、していない者が21名と、学習をしていない者が約2倍も存在することが明らかになった。加えて学習をしている者でもそのほとんどが1時間以内と非常に短時間である。この事実からやはり再履修者の多くは自宅での勉強が習慣化しておらず、授業の予習や復習にも十分取り組んでいないことが推測される。いずれの授業に対しても予習・復習は必ず必要であるが、必修科目である『英語Ⅱ』等でさえ、多くの学生達が自宅学習をほとんど行っていないという状況では単位の取得は非常に困難である。

2. 1. 2. 再履修者の英語における苦手意識

次に英語の分野別に苦手意識の有無を調査した。その結果、筆者の予想を大きく上回る分野において、再履修者は苦手意識を持っていることが明らかになった。これは英語を専攻しているにもかかわらず、英語学習がスムーズに進んでいないという深刻な事態を意味するものである。このことは本学の入試制度にも関連する。それはたとえ英語専攻の学生であっても、指定校推薦入試・スポーツ推薦入試によって入学した学生は英語を含む学科試験が入学試験時に課されていないことから分かる。当然入学試験で英語力が判別されないということだけで、英語力が低いと決めつけることはできないが、入学試験方式と英語に対する苦手意識との関連性は、後述する入学試験方式と授業欠席者数との関連からも明らかである。

2. 1. 3. 再履修者と海外（英語圏）長期滞在経験者

授業を始めるにあたって、英語圏各国での滞在経験者（いわゆる「帰国子女」・「留学生」から「旅行」まで）の有無を調査した。結果は表3の通りである。

表3 再履修者の海外渡航経験

	国・地域	期間	目的	人数		国・地域	期間	目的	人数
1	アメリカ	1週間	ホームステイ	13名	9	タイ	10日間	旅行	19名
2	ニュージーランド	2週間	旅行		10	シンガポール	5日間	旅行	
	アメリカ					オーストラリア	5年間	居住	
3	ハワイ	—	修学旅行			イギリス	10日間	旅行	
4	アメリカ	2週間	語学留学			タイ	10日間	旅行	
5	ニュージーランド	5日間	旅行		11	ハワイ・グアム	5日間	旅行	
6	アメリカ	6ヶ月間	ホームステイ			バリ・フィリピン	2週間	ホームステイ	
7	グアム	—	旅行			イギリス・カナダ			
8	ニュージーランド	5週間	語学留学		12	オーストラリア	3週間	旅行	
9	アメリカ	2週間	ホームステイ		13	ニュージーランド	6週間	ホームステイ	
	オーストラリア	5年間	居住			(海外経験なし)			
	イギリス	10日間	旅行						

表3が第1回目の出席者32名の海外渡航歴のすべてである。海外渡航経験が少ない・全く無い学生が31名で、海外長期滞在経験者は1名であった。

科目が異なるので厳密な比較はできないが、筆者が担当する Reading I（1年次必修科目・在籍25名）に海外滞在経験のアンケートを実施したところ、2年以上の海外長期滞在経験者が

7名いることから、再履修者クラスの1名は非常に少ない。

2. 2. 再履修者の本学入学試験方式

近年の大学入試の形態は十数年前と比べると非常に多様化してきている。各大学ともさまざまな入学試験の導入に努めている。ここでは必修科目の再履修者がどういった入学試験を受けてきたのかということについて論考する。

次に挙げる3種のデータとそこから得られる情報を整理してみたい。

表4 受験方式別クラス構成人数

入試方式	公募制推薦	指定校推薦	一 般	スポーツ推薦	センター試験
クラス在籍者数	18名	3名	11名	5名	2名
大学在籍者数	1,318名	218名	617名	70名	187名
比率(クラス/大学全体)	1.4%	1.4%	1.8%	7.1%	1.1%

表4から明らかなように、スポーツ推薦による入学者が他方式の1%台なのに対して、7.1%と群を抜いて再履修率が高い。アンケートにも多く書かれてあったが、外国語大学生でありながら外国語が苦手であるという皮肉な結果が得られている。当然この結果はこのクラスの中でも最も深刻な問題であることを示すと同時に、教授者側にも多くの課題をもたらしている。

2. 3. 授業への出席状況

授業への出席状況について報告する。再履修者は概ね授業への出席が良好とは言えない。もちろん積極的に出席しようとしている学生もいるが、必修科目でありながら皆勤者は皆無である。精勤者は少数で、ほとんどが欠席過多、中には現時点まで皆欠席の学生も存在する。

前回使用した受験方式別の表を利用して、各受験類型別の欠席状況を表5にまとめる。

表5 のべ欠席回数とその比率

	公募制推薦	指定校推薦	一 般	スポーツ推薦	センター試験
のべ欠席回数	189回	78回	130回	123回	35回
のべ授業回数	476回	84回	308回	140回	56回
欠席比率	40%	93%	42%	88%	63%

ここできわめて顕著なことは指定校推薦入学者とスポーツ推薦入学者の欠席割合が公募制推薦入学者や一般入試入学者のほぼ倍に近い欠席率を示していることである。この数字は授業の

ほぼ全てを欠席していると言えるものである。当然このような状況では単位の履修は非常に難しい。指定校推薦入試やスポーツ推薦入試は書類審査・面接・小論文のみで選考され、英語等の学科試験は課されない特殊な入試であるが、このことも学科授業への興味不足、ひいては欠席過多の原因になっていると考えられる。

2. 4. 受講態度

出席者の受講態度は概ね良好である。前述のように非常に多くの欠席者がいる中で毎回の出席者は非常に限られている。わずかに居眠り等をする者もいるが、他の学生はよく授業に集中していると言える。一般科目と同様、座席は自由としている。担当者は毎回授業開始10分前には教室で待機することになっている。しかしながら大半の学生は早くから教室に入り、授業の予習をしている。再履修者クラスながら意外なことは、学生の何人かは積極的に最前部の座席に着き、授業参加意欲が旺盛なことである。

学生への質問形態は最初指名せず、誰が答えてもいいように発問し、応答がない場合指名することになっている。質問の難易度にもよるが、ほとんどの場合積極的に答えようとする学生が多い。また挙手がない場合は指名することになるが、平素はあまり目立たない学生に解答を求めた場合でも、何らかの返答をしようとする者がほとんどである。筆者の経験から判断すると、一般クラスの場合よりこの点においては、はるかに積極的な学習活動が見られる。

3. 指導方法

学生の学習状況に対して、現在採用している指導方法について述べる。クラスの実態は「寄せ集め」的傾向が強い。公平に課題を出すものの、学年が2～4年生にまたがっているので、できるだけ全員が意欲的に参加できる授業形態を模索する必要がある。

3. 1. リーディング指導とライティング指導

英語Ⅱの授業では2種類のテキストを使用している。リーディング用教材とライティング用教材である。実際の授業ではリーディングを中心に授業を展開しているので、予習として学生に次回授業の内容把握を課している。一方、ライティングは授業では直接取り上げず、自宅で専用テキストをよく参照し、決められたトピックにしたがって英作文を完成させた上での提出を義務づけている。

3. 1. 1. リーディング指導における取り組み

○使用教材 『構造で読む英文エッセイ (改訂版)』石谷由美子編 (南雲堂)

授業そのものはリーディング指導を中心に進めている。テキストの難易度は高くない。

3. 1. 1. 1. 英文構造の理解

授業では学生を無作為に指名し、自宅ですべてまとめた英文の内容解釈を発表させている。その後、教授者を中心に学生に意見を求めながら、確認作業を行うという方法で進めている。しかしながら大半の学生が狭義での単語の意味に固執し、英文を和訳してはいるものの、結局日本語として訳文の意味がよく理解できないものが多い。つまり英文を全体として捉えて、充分理解することなく、とりあえず日本語に訳したのみの状態である。

教授者は英文の意味をスムーズに理解する方法のひとつとして、「速読」を推奨している。「速読」により英文を構造で捉え、その論理的展開をつかむという練習をさせている。その際には細かいことをいくらか捨象していくこととなるが、近視眼的な英文解釈から脱却させる方法としての必要性を重視している。ただし、はたしてこの速読だけで英文の構造が捉えられるか疑問も残る。

日本では高等学校以前の英語学習は、与えられた文章の意味を正確に理解することだけに重点が置かれている。たしかに一文一文を丁寧に理解することも時には必要であろうが、もう一つ重要なことは、全体として何を言っているのか理解することである。その助けとなるもののひとつが「論理」であると筆者は考えている。学生達目に触れる英文は一定の知識を持った大人が書いているものが多い。それゆえそこには「論理」に基づいた構造が存在するはずである。日本語で言えば「～であるから、だからこうなる」「こういう場合には3つの対処法がある。まず…、それから…」 「順序として、～をしてから、それから…をする」の類である。このような構造が分かれば、ある程度分からない単語や文が出てきても、大筋は理解できると筆者は考えている。このアプローチを重視すれば多少分からない英文でも、全体像を捉えることは十分可能である。このことについては次項の「英文速読の実践」と併せて解説する。

3. 1. 1. 2. 英文速読の実践

前項で「構造」を把握すれば英文は速読できると述べたが、方法はこれだけではない。「再履修」クラスということで、教材も基本的に難易度の高くないものを使用している。筆者がリーディングの指導をしている際、特に気になることが「読解力」と「和訳力」との混同である。おそらく高等学校以前では、教科書の英文を日本語に「逐語訳」、すなわち英文を後ろから読んで意味を考える訓練を受けていると思われる。言いかえれば「意味情報の読み取り」＝「読解力」(図1)よりむしろ「日本文の完成」＝「和訳力」(図2)に重点を置く学生が多い。これを防ぐために筆者は折に触れて図1・図2を板書し、考え方がいかに非効率かということを目視的に理解させるようにしている。学生達も頭で理解はしているようであるが、十分

に実行しているとはいいがたい。

例文 The students studying English at this school have to go to a country where English is spoken.

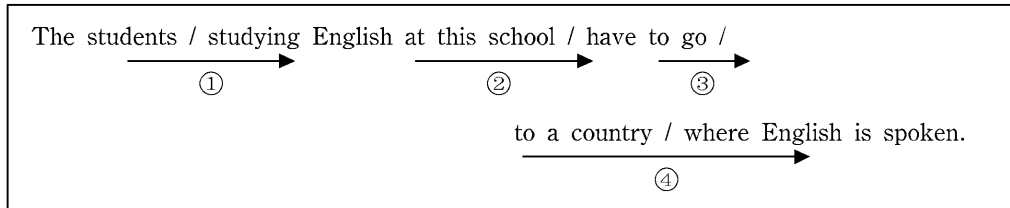


図1 意味情報の読み取りを重視したリーディング

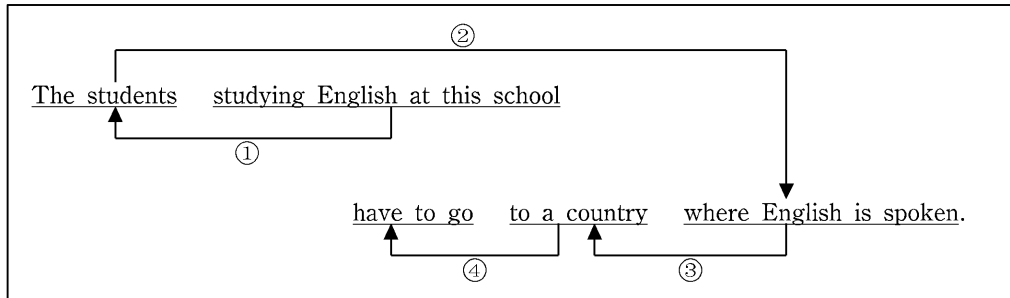


図2 日本文の完成を重視したリーディング

速読にかぎらず、読解をするためには情報構造の観点から図1の方式で、文の流れに従い前の方から情報を次々と言語処理し、短期記憶 (short-term memory) に保留して、次に来る表現と合体させて処理するという操作を繰り返さねばならないが、再履修生の多くは図2のように和訳文を作ることに固執し、日本語の語順に従って、後に来る表現をまず翻訳し、次に前の表現に戻って翻訳解釈するという、時間的ロスを伴う非効率的な読解作業してしまうのである。いずれの方式でもこれに加えて、文脈を手がかりにして賦活される一般的知識、即ち長期記憶 (long-term memory) に蓄えられた知識をも動員することになる。一般クラスの場合、図1のように英語長文の読解が早く、内容に関する質問に対しても正確な返答がなされるのに対し、再履修クラスでは図2のように和訳文の作成に終始し、文章全体の把握がほとんどできない。当然の結果として、内容に関する質問にもスムーズな返答がなされない。この事実は一般クラスと再履修クラスとの英文読解方法の違いが結果として顕著に表れている例である。

3. 1. 1. 3. 文章構成の理解

多くの英語の文章 (即ち、文の集合) はある程度のルールをもって書かれている。時には複

雑な構成の文章もあるが、あくまでも文章を書く目的は読み手に理解してもらうことである。それを実践するために、文章の書き手側はさまざまな文章構成をする。再履修生クラスではその中でもごく一般的な構成を何点か例示し、パターンとして理解するよう指導した。内容は以下の通りであるが、紙面の都合上、パターン1・パターン2のみ例文を示す：

パターン1 結論 Conclusions — 理由 Reasons

[①導入 (意見・結論) — ②理由1 (結論を支える理由) — ③理由2 (〃) — ④結論 (導入の確認)]

パターン1の例文

Should smoking be banned in public places?

- ① Smokers may claim the right to smoke, but non-smokers' right to protect themselves is more important. Smoking should be banned in public places for two main reasons.
- ② Firstly, this measure will protect non-smokers. Smokers can choose whether they smoke or not, but non-smokers don't have a choice. Non-smokers are forced to smoke. In a sense, the smoker is an offender and non-smokers are his victims.
- ③ Secondly, the attitude of smokers may influence other people. If somebody is smoking in a public place, young people may be encouraged to follow. Furthermore, if a person is trying to quit smoking and sees someone else smoking, it makes it harder for him to stick to his decision.
- ④ Therefore, to protect non-smokers, young people, and those who have decided to give up the habit, smoking should not be permitted in public places.

(石谷由美子編『構造で読む英文エッセイ (改訂版)』南雲堂、2008、p.14)

パターン2 分析 Analysis

[①導入 (事実の提示) — ②理由1 (社会的背景1) — ③理由2 (社会的背景2) — ④補足]

パターン2の例文

Green tea is booming

- ① Green tea is now very popular among young people. Oolong and other Chinese teas were accepted about twenty years ago as popular drinks. Previously, cola, soda, and juices had been predominant. Now, alongside Chinese teas, Japanese green tea has become increasingly popular with young people.
- ② Green tea's healthy image is probably the main reason for this development. Cola and juices can contain a lot of additives, whilst in their ads tea companies emphasize tea's healthy ingredients, such as vitamins and minerals, herbs and so on.
- ③ Furthermore, many young people, especially women, are diet conscious. They are always watching their weight. Juices and cola contain a lot of sugar, which keeps young women away from such sweet drinks.
- ④ Green tea is also drawing attention from Westerners for the same reasons mentioned above. But now, with consumers wanting ever healthier and lower-calorie drinks, water has become the next big thing.

(石谷由美子編『構造で読む英文エッセイ (改訂版)』南雲堂、2008、p.18)

パターン3 仮説 Theory — 立証 Proof

[①導入 (理論・仮定の提示) — ②実験 (実験方法の説明) — ③結論 (事件結果からわかったこと)]
※以降例文省略

パターン4 論争 Controversy

[①導入 (トピックの提示) — ②賛成意見 — ③反対意見 — ④結論 (まとめ)]

パターン5 比較 Comparison・対比 Contrast

[①導入 (比較・対象物の提示) — ②基準1 (AとBの比較) — ③基準2 (〃) — ④結論 (まとめ)]

パターン6 分類 Classification

[①導入 (分類基準の提示) — ②Aタイプ (第1グループの説明)
— ③Bタイプ (第2グループの説明) — ④結論 (まとめ)]

パターン7 指示 Instructions

[①導入 (トピックの提示) — ②指示1 — ③指示2 — ④指示3 — ⑤結論 (まとめ)]

パターン8 発生順序 Chronological Order

[①導入 (トピックの提示) — ②第1段階 (始まり) — ③第2段階 (展開)
— ④第3段階 (最終段階・現在の形) — ⑤結論 (まとめ)]

パターン9 原因と結果 Cause and Effect

[①導入 — ②原因 (原因となる事象の説明)
— ③結果・影響 (事象による結果・影響) — ④結論 (まとめ)]

パターン10 経過 Process

[①導入 (トピックの提示) — ②第1段階 — ③第2段階 — ④第3段階 — ⑤結論 (まとめ)]

パターン11 新製品の説明 Explanation (New Product)

[①導入 (新製品の提示) — ②機能 (使い方の説明) — ③詳細 (寸法/価格など) — ④結論 (コメント)]

パターン12 定義づけ Definition

[①導入 (トピックの提示) — ②定義 (言葉の定義)
— ③説明 (トピックが問題となる社会的背景など) — ④結論]

パターン13 データの説明 Explanation (Statistics)

[①導入 (データの提示) — ②データの説明 (提示されたデータを説明)
— ③分析・説明 (データからわかること・社会背景など) — ④結論 (まとめ)]
(石谷由美子編『構造で読む英文エッセイ (改訂版)』南雲堂、2008)

以上、13のパターンから構成されている英文を授業で内容把握を行った。各パターンとも4つ (一部5つ) の段落から成り立っており、構造を理解していれば簡単に全体の文意は把握できるものばかりである。このパターンの構造は談話文法の扱う問題である。したがって、これには談話文法の知見が役立つであろう。談話は意味上まとまった統一体をなす。すなわち脈絡

が、談話が成立するためには必要となる (Edmondson 1981)。「視点の一貫性の制約」などの談話制約も「文章」の読解に関係してくる (Erteschik-Shir 1979)。このような広義の言語学の知見を基にして、文章のパターンを考えてみるが必要と思われる。教授者はこのような談話文法の知見を十分理解した上で、その理論を学生に教えるのではなく、その知見のエッセンスを生かす形で、読解力の育成に努めることが大切であろう。この姿勢は後述する文文法の知見を生かす場合においても同様である。この談話の読解のためには、さらに当該社会の歴史と風土、慣習、社会的状況、並びに国際関係などのその社会の一般常識も必要となってくる。これらの点にも配慮が必要であるし、また学生の知的関心を引き起こすチャンスでもある。

もう1つ、再履修者に対して特に力を入れて指導していることとして、単語の発音がある。中学校・高等学校での英語リーディングの授業においてよくあることだが、発音が分からない単語をローマ字的に読む学生が非常に多いのである。これらの学生は予習を怠っていることは言うまでもないが、辞書を使用させても発音記号が全く読めないのである。学生は電子辞書の単語発音機能を使用する者も少なくはない。ただし、電子辞書を使用しながら発音調べを行っても、読解速度、結局英文内容把握の足かせとなっているだけでなく、これが本当に授業中の学習活動といえるのかどうか筆者は強く疑問に思っている。当然のことながら、この点についても是正しない限り、スムーズな内容把握は難しいと思われる。1つの対策として、学期の最初の授業で発音記号の解説をするとよいかもしれない。

以上のことからテキストの進め方にも十分な配慮が必要となってくる。テキストは各ユニットそれぞれ2つの長文問題から構成されているもので、1つめの長文はその内容に関する確認問題が12題ほど付されており、2つめは各段落の要点整理を要求する設問がある。最初のものだけ次にあげておく。

● Reading 1

Mobile Phones may affect your fertility

① Do you use a mobile phone? Many people fear that mobile phones may adversely affect our bodies. One possible risk many researchers have pointed out is that mobile phones can affect men's fertility.

② Dr. Agarwal and his colleagues at the Cleveland Clinic, Lerner College of Medicine at Case Western Reserve University in Ohio, conducted the following experiment to examine the relationship between mobile phone usage and men's fertility. He examined 361 men who came to the center for infertility tests. These men were divided into four groups, according to the frequency of their mobile phone usage.

③ The examination showed that a man's sperm count declined not only in volume but also in quality according to the frequency of the subject's mobile phone usage. In men who used a mobile phone for more than four hours a day, there was a 30% drop in sperm mobility (movement) and viability compared with men who did not use a mobile phone. Dr. Agarwal

concludes that mobile phone radiation may harm sperm by damaging DNA and disrupting cells that produce testosterone.

④ Scientists believe this study is still in the preliminary stages and needs further research. More samples are necessary to test the influence of mobile phones on sperm. Also, how do age, weight, smoking, and stress affect the relationship between mobile phones and fertility? Such questions require answers as well. Today, it is difficult to imagine life without mobile phones. However, if mobile phone usage really does affect fertility, more and more men may soon be faced with a hard choice — phones or fatherhood.

◇20◇

(石谷由美子編『構造で読む英文エッセイ (改訂版)』南雲堂、2008、p.20)

【1】それぞれの段落について次の質問に答えなさい。

1. ここで検証しようとしているテーマは?
.....
2. Dr. Agarwalはどのような調査を行ったか。
.....
3. その調査結果からわかったこととは?
.....
4. これからどんなことも調べられないといけないと筆者は言っているか?
.....

【2】 True or False?

- (a) Dr. Agarwal examined the relationship between mobile phones and women's fertility. ()
- (b) Dr. Agarwal based his study on how often each subject used his mobile phone. ()
- (c) He found that the volume but not the quality of sperm declined according to the frequency of mobile phone usage. ()
- (d) According to Dr. Agarwal, mobile phone radiation may affect sperm. ()
- (e) Scientists have already proved that smoking affects men's fertility ()
- (f) Some experts say that more studies will be needed before a definite conclusion can be reached. ()

【3】 Answer the following questions in English.

- (a) What did Dr. Agarwal and his colleagues try to examine by collecting data from 361 men?
A:
- (b) How many groups were the 361 men divided into?
A:
- (c) According to Dr. Agarwal, what cells may be affected?
A:

Title affect 影響する fertility 生殖能力 ①risk 危険性 adversely 逆に point out 指摘する
 ②colleague 同僚 conduct 行う examine 検証する usage 使用 infertility 不妊 frequency 頻度
 ③sperm 精子 count 総数 subject 被験者 mobility 動き movement 運動 viability 生存能力
 radiation 放射能 harm 害する disrupt 壊す testosterone テストステロン (男性ホルモン)
 ④preliminary 準備の

3. Theory/Proof ◇21◇

(石谷由美子編『構造で読む英文エッセイ (改訂版)』南雲堂、2008、p.21)

教授者はこれら設問に対して、学生に問題文 (英文) の音読をさせた後、解答の確認を行っている。

3. 1. 2. ライティング指導における取り組み

○使用教材『ライティング・フルーエンシー』西本有逸・高津由紀著（英宝社）

上記のテキストは自己表現的な英文を養成するためのものである。各章に1トピックという形で構成されており、それぞれに実際の言語の使用場面を想定された模範例が付されている。テキストの難易度は高くない。以下に各トピックを示す。

○各章のトピック

【Part.1】到達目標：分量のある英語を自由に書けるようにする。Unitごとに挙げると、

Unit1. ファンレター、Unit2. Travel is fun. / Travel is not fun.、Unit3. 笑える失敗談、Unit4. 大学周辺のおすすめスポット、Unit5. She was not enjoying the party.、Unit6. 水晶の玉に映る10年後の私、Unit7. 梅雨時の過ごし方、Unit8. 私の好きな○○、Unit9. Tokyo vs. Kyoto、Unit10. 私のストレス解消法。

【Part.2】到達目標：形式を意識して英語を書けるようにする。Unitは、

Unit.1 Chronological Order、Unit.2 Controversy、Unit.3 Comparison / Contrast、Unit.4 Process、Unit.5 Cause and Effect。

以上の構成となっている。特に【Part.2】の内容はリーディング教材の内容と連動した形となっており、そのまま予習・復習に活用できるようになっている。ただし、【Part.2】の内容については後期に行う予定であり、今回は報告できないことを断っておく。

ライティングの指導方法は毎時間教室で上記のトピックについて簡単に作成要領を口頭で説明し、作成自体は各自の宿題として次の授業時まで提出することを原則としている。ただし未完成のものや、提出締切に間に合わせるための「手抜き」作成を防止する策として、学生自身が不十分と自覚しているものについては1週間の延長を認めている。各章のタイトルから分かるように、英文作成レベルは高くない。テキストはユニット毎に3例ほどの模範文が最初に提示され、これらを参考に文章構成するようになっている。その後イラストを用いた作成手順が紹介され、視覚的に文章を組み立てていけるように工夫されていて、完成文がイメージできるようになっている。

これらの課題に関しては、出席学生の約半数が指示通りの作成・提出をしている。しかし提出が遅れたり、全く提出しない学生も少数ながら存在する。

3. 2. 指導上の問題点

当該クラスと他クラスとの最も大きな相違は「再履修」クラスということである。それは「再履修」＝「やり直し」という単純な図式ではなく、「なぜ再履修することになったのか」という理由が学習指導に関係してくる。この理由の検証が大きな課題であり、学生各自にとっても深刻な苦悩となっているのである。

3. 2. 1. 学習面における問題点

学習面における問題点は明確である。習熟度の差である。一般クラスにおいては習熟度別にクラスを編成しているが、再履修クラスにおいてはこの点の配慮は実質不可能である。したがって個人指導が重要となるが、十分できているとは言えない。現在は最初に指名した学生の発表内容によって授業のレベルが大筋決まってしまう。教授者はあらかじめ用意している各時間の指導内容をこなしてはいるが、臨機応変に対応しているというのが実情である。

授業が進行する上で現状に応じた柔軟性が必要であることは言うまでもない。しかしながら、再履修クラスの場合はこの点については筆者自身、良く言えば柔軟性かもしれないが、言い方を変えれば授業到達目標に「ぶれ」が生じているのではないかともし自省している。学生間の習熟度に大きな差がある「寄せ集め」クラスの場合、学生個々の実力に応じた学習指導は実質不可能であるかもしれない。しかし理想的には「再履修」クラスは柔軟性ありきとした上で、「ぶれない」配慮も充分に行うべきと筆者は考えている。これは再履修クラスだけの問題ではないが、シラバスの到達目標に安易な妥協は許されないと教授者自身、強く認識すべきであろう。個別指導が必要である点を考えると、再履修クラスのサイズを小さくし、少人数教育を目指すべきである。

3. 2. 2. 教授法の問題点

一般学生の中には英文の構造・構文の基本的な事実が理解できていない者が多いが、これはそのまま再履修者にも当てはまる。そこで学生の必要に応じて適宜、構文の解説をしていくべきであろうが、現在のところ充分にできているとは言えない。これが反省点であると同時に今後の課題でもある。構文の解説には過去半世紀以上にわたり言語学をリードしてきた変形成文法の研究がもたらした成果をできるだけ取り入れることが有益であろう (Chomsky (1965), Emonds (1976), Jackendoff (1972) 等)。例えば put という動詞は目的語を取るだけでなく、さらに必ず場所または方向を表す表現を教える。これが 5 文型中、どの文型に入るかなどの無用な配慮はせず (5 文型では説明できないことがあまりにも多い)、文法事実をそのまま教える。また say は目的語を 1 つとるだけで充分であるが、tell は間接目的語とその後目的語として節をとることを教える。また want (like / wish / prefer 等) も、persuade (ask / urge / order / force 等) も外見上、類似した不定詞構文をとるが、want 型の動詞の場合、I want (John) to go. では John は want の目的語ではなく、go の主語としてのみ働くが、他方 persuade 型の動詞の場合、I persuaded John to go. では John は persuade の目的語であり、且つ同時に go の主語でもあるという構文上の違いがあり、一見同一にみえる異なる構文の存在を意識させる。つまり動詞を中心として文型が決まることを意識させる。この文の統語構造を理解させて、文意を正しく把握させることが英文読解の第1歩である。このような言語理論

研究の成果を、理論自体を教えるのではなく、利用できる成果だけを理解しやすいよう、必要に応じて多少修正して学生に教示することは有意義であろう。以上は英文の読解・作文両方の指導にあてはまると思われる。

3. 2. 3. その他の問題点

再履修クラスには学習面の他にも深刻な問題がある。授業への出席意欲や学習意欲の欠落、モチベーションの低さ、また精神面での不調などである。誤解のないように言いかえれば、これらはいずれも学生の学習熟度と直接関係がないということである。

Uehara (2000) による各学生へのアンケートの結果から、過年度なぜ単位を取得できなかったのか、その理由を表6にまとめている。

表6 単位を取得できなかった理由（自己申告）※複数回答あり ※（ ）内は内訳

単位を取得できなかった理由	人数	単位を取得できなかった理由	人数
1. 出席日数の不足	29	2. 英語に興味がなくなった。	5
・「うつ」「ひきこもり」等の精神疾患	(6)	3. 提出物を出さなかった。	5
・その他の体調不良	(4)	4. 先生が厳しすぎた。	2
・不登校	(3)	5. 授業のレベルについていくことができなかった。	1
・早朝1限目の授業による起床困難	(3)	6. クラスに友人がいなかった。	1
・クラブ・アルバイトへの専念	(2)	7. 分からない	1
・怠惰・その他	(11)		

注目すべきは、大半の学生が単位を取得できなかった理由を自分自身の欠席であるとしていることである。欠席過多による落第は珍しいことではないが、それがゆえに再履修となっているにもかかわらず、欠席者の数はきわめて多い。この構図は単純ではあるが、非常に奥深い厄介な問題であると再認識せざるを得ない。いかなる状況においても最低限出席さえすれば何らかの指導を与えることができる。しかし意思疎通の手段が完全に断ち切られた状況でのクラス運営は非常に難しい。不本意ながら「授業に出ないのなら仕方がない。大学は『義務教育』ではない」と割り切って考えるほか、どうすることもできないというのが現状ではないだろうか。次項においてはこの問題に関しての改善案を模索してみたい。

4. 授業効果の向上

ここまで本学外国語学部における必修科目の再履修者の現状と取り組みに関して報告をしてきた。調査範囲は「学部必修科目（英Ⅱ）」に限定したが、「再履修」クラスでの授業効果を高

めるためには、教授者が一般クラスよりもはるかに多く、個々の学生についての情報や人間性など、コミュニケーションを通じて知っておく必要がある。しかし「個人情報」の取り扱いについては昨今よく問題にされるように、非常にデリケートな部分がある。結果として学生と教授者との信頼関係がなければ、両者の情報交換にも自ずと制約がかかってしまい、最終的に「信頼関係」「情報交換」ともに未確立のまま授業を開始してしまうことになるのである。難しい問題ではあるが、可能な限りこのような事態は避けるべく努力すべきである。

4. 1. 英語学習意欲の啓発

再履修クラスの学生の抱える最大の問題は、程度差はあるにしろ、過去における単位取得の失敗からくる挫折感とそれに伴う語学力等に対する自信の喪失、無気力であろう。これを克服する1つの方法はCrookes (2003, ch.8) が指摘している、学生間の競争によるのではなく、協同作業によるグループ学習である (pp.136-138)。これはAmes (1984) などの報告に基づく有効な方法である。教室内にいくつかのグループを作り、仲間意識を芽生えさせ、教材を与え、お互いに助け合って、例えば英文読解や英作文をやらせ、グループ全体で解答を出させる。これにより学生が自信を取り戻すことに成功している。また各学生のレベルに合った到達目標を設定し、宿題やテストを課すのも有効であるという報告がある (McCombs 1994など)。この方法は習熟度に差が目立つ再履修クラスには特に適切と思われる。この学習意欲の問題の解決は今後の検討課題である。

近年急速に発達してきたマルチメディアに支えられた語学教育のテクノロジーを積極的に活用して、学生の学習意欲を引き出すことも今後検討する。教材として今まで通りのプリント教材に加えて、毎回20分程度ビデオ教材を利用し、現代社会の諸問題を英語を通して考えさせる。この方法の有効性は既に指摘されている (Moore, ed. 1996, ch.12)。またこれは本学においても成功している実践例がある (Cohen 2009)。

4. 2. コミュニケーションの確立

いかなる場合においても、教授者と学生との間に信頼関係がなければ授業効果の向上は困難である。同じ「クラス」とは言っても高等学校のように学級担任がいて、同じ顔ぶれの仲間がいつも集っている状況とはかなり異なる。もし高等学校及びそれ以前と全く同じクラス編成を組むことがさほど困難でなければ一考に値しようが、一般的な大学の教育システムは高校のそれとはかなり異なっており、事実上実施は不可能である。コミュニケーションの改善だけが授業効果の向上につながるわけではないが、本稿では主にこの点について論考していきたい。

4. 2. 1. オリエンテーション

英語Ⅱ（再履修）クラスでは前述のように、欠席者が非常に多い。特に4月の授業開始の時点から全く出席していない学生にとっては、オリエンテーションをはじめ、授業の状況が全く分からず、更に出席意欲を失わせる結果となっていると思われる。

通常クラスのオリエンテーションを行う時は授業の方針や学生の心構えなどに重点を置いているが、再履修クラスの場合はアンケート実施のほか、簡単な英語で学生に話しかけて学生の緊張感を解きほぐしつつ、学生が英語の授業自体に興味を持つようにした。授業後、数名の学生に過年度の当該授業と本年度の授業との違いについて感想を求めてみたところ、ほとんどの学生が「以前の授業ほど緊張しなかった。」と答えた。これは「緊張感のない授業」という意味なのか「肩を張らずにリラックスして参加できる授業」という意味なのか理解し難いが、少なくともこの問いかけに応じた学生は授業の出席率が良好である。初歩的なことだが、授業は学生が出席してはじめて成立するものであることを再認識した。

4. 2. 2. Blackboardの導入

本学は他大学にさきがけ、最新学習設備等の導入に積極的である。中でも特に注目に値するものとしてBlackboardシステムがある。先般から何度も指摘しているように、授業に1回でも出席してさえくれれば何らかのコミュニケーションを取ることができるが、初回の授業から全く出席しない学生に対してはコミュニケーションの手段が全くない。そこで筆者は本学独自のこのシステムに着目した。

Blackboardシステムはインターネット上のやりとりであるから直接顔を合わせることは出来ないが、少なくとも教師側からの連絡や授業内容、宿題などを欠席者に知らせることは可能であるし、学生からの問い合わせに応じることもできる。学生が端末機器さえ持っていれば、当該授業の連絡事項・授業内容など、非常に多くの情報を学生に伝えることができる。教授者は毎回掲載事項を更新しなければならないが、ほぼリアルタイムで学生に情報を伝えることができるのは大きな特徴である。

当然のことであるが、このことにより授業への出席意義が損なわれることも危惧される。再履修学生は一般学生とは違い、大学に来ること自体難しいのである。このBlackboardシステムも使い方を誤れば「消極的コミュニケーション」、さらには単なる「通信教育」になってしまう可能性は否定できない。しかし、少しでもコミュニケーションの手段があれば、何らかの糸口が見いだせる可能性は増加すると考えられる。

4. 3. コミュニケーション授業の限界

コミュニケーションの向上は授業を成立させていく上での重要な手段のひとつであるが、こ

れだけで再履修クラスの全ての問題が解決されるわけではない。前述のように筆者は初回の授業でアンケートを実施し、できる限り学生のことを知るよう努力した。その他にも授業中の学習作業や自宅で行う課題などを工夫した。しかし、この成果を客観的に評価し学習の成果を判断することは単純ではない。

5. まとめ

「再履修クラス」における客観的評価はこのクラス編成の形態上簡単ではない。それは受講生の学年が2年生～4年生と幅広いことや、入試方式により学生の出席状況が異なっていることなど、そもそも授業の内容とはあまり関係のない部分において差異が生じてしまっているからである。学生達から可能な限り情報・データ等を収集し、授業に役立てることは重要であるが、これらをそのまま成績評価に結びつけることは不可能である。授業時間内の学習活動・出席回数・試験や課題などを総合的に判断し、成績を確定するべきである。しかし、「再履修クラス」の場合は学生個々の状況が異なりすぎて、基準の設定がきわめて難しいというのが実態である。この部分に関してはさらに踏み込んだ調査・分析が必要であろう。

今年度初めて「再履修クラス」を担当する者として、当初の予想よりはるかに多くの問題点の存在に気付いた。例えば、大学では学習者がすすんで自学自習に取り組むことも多く、TOEFL・TOEICなどの資格試験にも積極的にチャレンジする学生も決して少なくない。学生自身が自分をコントロールしながら将来に向けて学力を身につけようとすることは、本学の標榜する「実学」の理念にも通じている。ところが再履修クラスにおいては、これらの積極性に逆行する側面も垣間見える。まだ年度の半分が経過しただけに過ぎないが、再履修生には単位の取得を目指すだけでなく、同時に自らの英語力を高めていく動機付けを模索する努力が必要とされる。

【参考文献】

- Ames, C. (1984) "Competitive, Cooperative, and Individualistic Goal Structure," in R.E. Ames & C. Ames, eds., *Research on Motivation in Education* (vol. 1), Academic Press, New York.
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Cohen, T. (2009) "'Reading' Movies," *Journal of Inquiry and Research* 90, 103-120, Kansai Gaidai University, Osaka.
- Crookes, G. (2003) *A Practicum in TESOL*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Edmondson, W. (1981) *Spoken Discourse*, Longman, London.

- Emonds, J. (1976) *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving and Local Transformations*, Academic Press, New York.
- Erteschik-Shir, N. (1979) "Discourse Constraints on Dative Movement," in T. Givón, ed., *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, Academic Press, New York.
- Uehara, Y. (2000) *An Approach to School English*, Osaka University Press, Osaka.
- McCombs, B. L. (1994) "Strategies for Assessing and Enhancing Motivation," in H.F. O'Neill & M. Drillings, eds., *Motivation: Theory and Research*, Erlbaum, Hillsdale, NJ.
- Moore, Z. ed. (1996) *Foreign Language Teacher Education, Multiple Perspectives*, University Press of America, Lanham, Maryland.
- 石谷由美子編 (2008) 『構造で読む英文エッセイ』東京：南雲堂
- 西木有逸／高津由紀 (2009) 『ライティング・フルーエンシー』東京：英宝社

(ひらた・かずひこ 本学大学院博士課程後期修了)

